

## 知識のない反対派

私が北海道民から嫌われた出来事  
と言えば、まず、これをお伝えしな  
ければならない。

2004年10月1日付けの毎日新  
聞北海道版に、「GM大豆の栽培  
計画」と書かれた記事が掲載  
された。事実関係には実際と少し違  
う点もあったが、もちろん私のこと  
を書いた記事である。

新聞記者に対して私は、1997  
年と98年にGM大豆を栽培して政府  
の交付金をしっかりといただいた経緯  
を中心に話した。だが、紙面上で注  
目を集めたのは「絵に描いた餅」程  
度の計画を話した部分で、  
これにみんなが騒いだ。

朝刊が発売された当日、  
昼ごろまでは誰からも連絡  
がなく、私自身もこんなも  
のだろうと思っていたのだが、  
12時を過ぎたころにな  
ると、ほぼすべての新聞社  
とTV局が取材にやって来  
た。町からは農業担当課長  
が普及所課長を連れてやっ  
て来て、「そんな計画は止め  
てくれ」と言い出し、翌日  
には農協の組合長もやって  
来て同じことを言い出した。

なんでGM大豆ごとき  
で、それほど騒ぐのか？  
正直、今でも理解できない。  
といっても、一番理解できていなか  
ったのは、止めに来た当の本人た  
ちだろう。

周りの農家も当然のように中止を  
要求してきたが、理由のほとんどは、  
「その様な安全性が確認されていな  
い気持ち悪い物を作ってどうす  
る？」というものだった。

**当然、私は正論で応じた。**

国家が96年に輸入・栽培・流通・加  
工を認めた安全な大豆であり、それ  
を我われは8年間食べていると。だ  
が、そう説明しても、「そんな危険  
な物を食べているはずがない！」と

反論してくる。私程度の人間が知っ  
ているのだから、当然、みんなもG  
Mについての知識があるものだと思  
っていたのだが、これが一番の間違  
いであった。

毎日新聞が報じてから27日後に裁  
培計画は中止した。だが、相変わら  
ずみんなは危険だと言いつつ、かとい  
つて、1500万tのGMコーンと4  
00万tのGM大豆、GM菜種、G  
M綿実の輸入が中止されるわけでも  
なかった。

そういえば、厚生労働省とWHO  
が決して認めない、エボラ出血熱や  
エイズよりもたちの悪い伝染病があ  
り、それも10mくらいの距離で感染  
するらしい。それは、バカと貧乏。

結論を言うと、バカと正しい  
ことを知ろうとしない無知  
に付ける薬は存在しない。

先人たちはそれをこう言った。『類  
は友を呼ぶ』。英語では、“The  
same birds in the same basket.”ま  
つ、真性のバカは誰なのか、一生の  
テーマになるかもしれない。

話は前後するが、まったく恥ずか  
しい話で、私が栽培しようとしたG  
M大豆が安全かどうかを反対派はま  
ったく知らなかったのだ。知らない  
時は普通、黙っているものだが、こ  
こぞとばかりに私に攻撃を仕掛けて  
くる様には、「窮鼠猫を囓む」（追い  
詰められたネズミが猫を噛む）、も  
しくは「螻蛄の斧」（カマキリが前  
脚を上げて大きな車に向かってい  
く）の表現がびつたりだ。

しかし、批判をいただくほどGM  
作物への期待は増すばかりであっ  
た。

## GM潰しの代償

その様な罵声を浴びせられる環境  
の中で、放送大学北海道学習センタ  
ー所長で元・北海道大学農学部名誉  
教授の富田房男先生や同大学大学院  
農学研究教授の浅野行蔵先生か  
ら、励ましとご指導をいただいでい  
ることは心から感謝している。

後から分ったことだが、北海道大



学の中でも「GMを推進する」と発言できる先生が数名しかいないという事実、北海道の未来を象徴するものだろう。

その数少ないGM推進者の前で、あるバイオ関係企業の社長は、「北海道にはバイオニア精神を持った農家はいませんね」と発言した。それを目の前で聞いた時には、**事実を語られた情けなさに何とも言えない空しい気持ちになった。**

とはいえ昨年12月、農水省は国産GM作物の開発計画を発表した。これにより、ようやくGMの作物が影の存在から表に出る可能性が出てきた。

それにしても遅すぎる対応だ。収量増産、機能性、環境対応性など可能性が溢れているGM作物の未来を潰したのは農家である生産者だ。「バイオ」、「BIO」と呼ばれて20年以上の年月が経つが、**生産者が現場で使える唯一の技術を自らの手で潰すことの意味を分かっていない者が何人いるのだろうか。**

米国と日本の状況の違いも気になる。特にほつきり違うのが、**GM技術を利用してアメリカ人の国家に対する信頼感だ。**子供の同級生の親にアメ

## ネットで見つけた 私、宮井に対する罵詈雑言

北海道の遺伝子組み換え大豆 ついに栽培阻止！  
宮井氏ついに断念

10月27日、地元地区の農家の栽培中止を求める決議などが出されたことを受けて、宮井氏が計画していた来年度の生産を断念したことが報じられました。

これまで北海道が中止を要請し、10月20日には、宮井氏が組合員として所属する、なかめ農協が加入組合員のGM作物の栽培を規制する方針を決めました。規制を無視した場合、GM以外の作物も含め一切出荷をストップする罰則を課せました。そして地区農家の決議が出されてついに宮井氏は生産断念せざるを得なくなりました。生産者と消費者が一体となって北海道農産物の安心・安全を守ることができました。

強引に出荷した「前科」がある宮井氏

10月始め、北海道夕張郡長沼町の西南農機(宮井能雅氏)が来年度に遺伝子組み換え(GM)大豆の商業栽培を計画しているとわかって以来、北海道、JA、市民団体、生協、有機生産者団体、食品メーカーなどさまざまな方面から宮井氏に栽培中止を強く求めてきました。しかし、宮井氏は輸入・流通が認められたGM品種であり、作付けは止めない、と強硬に拒んできました。宮井氏は98年、99年に表示のないまま、8トンを出荷したことも表明し、消費者にショックを与えました。

しかし、先にここでお知らせしたように、宮井氏が計画する来年度の作付けは2003年3月から罰則強GM大豆の栽培計画を中止したことに対して、「ついに栽培計画阻止!」、「生産者と消費者が一体となって……安心・安全を守ることができました」と、反対派の成果報告がされている。

遺伝子組み換え大豆 その国際的攻防

宮井能雅という男がいる。メロンでも有名な北海道夕張郡、長沼町の農業有限会社である。こいつが遺伝子組み換え大豆を生産したいと言いついて、長沼町でまてんやわんやの騒ぎになっていた。この宮井は西南農機有限会社という会社を経営する代表取締役。既に遺伝子組み換え大豆を98、99年に生産、出荷した。10アールあたり180kgで生産量は約98トン、GMOワールドの2004年10月4日刊による情報である。

遺伝子組み換え大豆、言うまでもなくアメリカ主導のバイオテクノロジーの産物であり、遺伝子操作して種用の農薬などが利用できる大豆にしたためた。害虫なども付着しないGM大豆といわれることもある。

日本の農業を継承するために存在しているとは思えない、霞ヶ関有数の農産物である農水省調査官の新本英二によれば、遺伝子組み換え大豆は政府公認であり、日本国内で生産すること自体は何ら禁じられていないという。

ただ、これまで日本国内では大豆は全て従来の組み換えではない、天然大豆で作ってきた。ごく一部生産されるのも研究用がほとんどで、実際に消費者が食する豆腐や納豆はほとんど使われていなかった。これまで何年かに渡ってこみ入れた取り組みをしてきた宮井のようなケースは極めて例外的といえることができる。

今、遺伝子組み換え大豆がリリースされてからの安全性への疑いが拭ききれず、逆に組み換えではない大豆の需要が急増している。全国の農家は食する豆腐や納豆はほとんど使われていない。この何年かは北海道を初めとして農家が大豆生産拡大に意欲を持って対応してきた。消費者の判断能力が良い効果を与えている好例である。

ところが、この宮井能雅、地元でも評判のこんこちき野郎らしくやくざものと思えない。聞き直りしただけでなかった。

宮井氏が過去にGM大豆を生産・出荷したことに触れつつ、「……地元でも評判のこんこちき野郎らしくやくざものと思えない……」という人物評。これに対して宮井氏は、「……このたびGM大豆に、ご興味を持っていただいても感謝しています……」とコメントを返しているが、反応はないようだ。

# オレにも言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

リカ人がいるが、その人に、「GM作物は誰が安全と言ったのか?」と聞かれ、FDA(米国食品医薬品局)と日本の厚生労働省だと答えたら、そのアメリカ人は、「じゃ、何も問題ないじゃないか。なぜ日本人はそんなに反対するんだ?」と発言した。日本

の学校で日の丸、君が代を歌わせないことが当たり前で、それを支持する親たちからマトモな子供が生まれるはずがない。少なくとも米国とは20年の差が開いていると認識すべきである。

東アジアの民達よ、あなた方が独自の文化を持つ意義は何なのか? その代償は反対した生産者と消費者と呼ばれる方々にしつかり支払っていただくのが筋だろう。

